Science in culture

ペンはカメラより強し

英国美術院(ロンドン)の夏の展覧会に出品されている外科医のスケッチが、展覧会に新たな次元を作り出している。

原文: *The pen is mightier than the camera*

Nature Vol.430(19)/1 July 2004; www.naturejpn.com/digest

Martin Kemp

なぜ科学に携わる人が手書きのスケッチに頼る必要があるのだろうか。現代はデジタルカメラの時代だ。高解像度の画像が得られ、加工も自由自在にできる。それに電子顕微鏡のような装置だって使える。間違いを犯す可能性のある人間が関与しなくても、対象物を観察し、画像化することが可能なのだ。それなのに、なぜ時代遅れと思われるような手法を用いるのだろうか？

それは、正確にスケッチするという行為が今でも、描き手が対象物を鋭く観察できるようにするための最良の方法だからなのだ。それに、見る人々に情報を伝達するという観点で言えば、スケッチほど対象物をシャープに捉え、直接的で、動きを伝える視覚的言語が他にはないからというのが、もう1つの理由だ。スケッチは、他の静止画像ではできない方法で時間的制約を克服できる。スケッチを使えば、1つの過程や外科的処置の各段階におけるデータを重ね合わせることができ、なおかつ各段階を明確に示すことができる。スケッチが出来上がっていく様子を見ていれば、そこに示されているものを順を追って見ていくことができるのだ。

絵を描く行為は最大級の視覚的集中力を伴うが、この点を画家、そして似顔絵や肖像画のモデルになったことのある人に対して改めて指摘する必要はないだろう。かつて英国美術院の初代院長 Joshua Reynolds は、絵を描くことは「対象物を見るということを学ぶ」方法の1つだと語った。今年の英国美術院の夏の展覧会では、1960年代に「恐るべき子供たち(enfants terribles)」と称された David Hockney と Allen Jones が絵画部門のまとめ役を託されたが、一部の展示物を美術以外の分野から選定したのは、いかにも彼らしい決定だった。

もっとも反響が大きく、賞まで受けたのが、パプワース病院(英国ケンブリッジ)の心臓外科医 Francis Wells のスケッチだった。その一例が上のスケッチで、心筋梗塞後心室中隔欠損症の修復手術の様子をあらわしている。Wells は、このスケッチに示されている事柄を次のように説明する。「左心室腔に到達するための左心室の切開、乳頭筋と房室弁の裏側との関係、病変部(この症例では中隔の欠損孔)、欠損孔をふさぐためのパッチを固定するための縫合、固定されたパッチ、そして切開部を閉じるために必要な縫合が、ここには示されている。」

このスケッチの衝動的な描線は、スケッチが描かれた当時の状況を物語っている。手術を終えた Wells は、コーヒーをすすりながら、執務室に集まった見学者や研修生の外科医に対して、外科的処置を説明した。その際に描かれたのが、このスケッチなのだ。描線のスピード感と重量感、そして部分的な網掛けは、情報を熱心に伝達する際に不可欠で、ここでは重要度の高い事項のみが選び出され、写真やビデオに見られる視覚的「雑音」は排除されている。このスケッチが実際に描

かれた様子を見ていない人でも Wells の思考の流れに沿った手の動きをはっきりと感ずることができる。それは Hockney や Jones が手早く描き出すスケッチと何ら変わるところがない。確かに、Wells のスケッチは、Hockney の特に 1960 年代の作品と著しく類似しているのだ。

情報を伝達するためにスケッチを描く行為に特別な時空間的性質があることは、Wells 自身も十分に認識している。「手術を終えた直後に自分の考えをスケッ

チにしていると、目と手の相互作用によって手術の続きが行われているように感じる。」このことは、「スケッチが他のいかなる視覚的記録手段よりもすぐれていることを意味する。スケッチを描く行為は、自分たちが使っている装置に伴う限界などの制約条件なしに、自分の考え方や発想を頭の中で組み立てたそのままの形で伝達するプロセスだからなのだ。」

科学や技術を伝授する場にスケッチを再び導入する動きが見られるのは興味深い。Wells も言っているように、スケッチは「強力な教授法であり、より効果的な説明ができるようになる。描線を使って、動きを実演することができるからだ。これは画家が対象物を認知する過程にとっても似ていると思う。画家は、紙の上に線を描き始めるまでに対象物を何度も何度も見返している。」

Wells のスケッチが展示されている英国美術院(ロンドン)の夏の展覧会は8月16日まで開催される。

Martin Kemp は、オックスフォード大学教授(美術史専攻)で、ウォーレス・ケンプ・アルタクトの共同ディレクターでもある。